第2章　社会性の学習の指導の実際

１　小学部低学年「社会性の学習」の指導事例

２　小学部高学年「社会性の学習」の指導事例

第2章　社会性の学習の指導の実際

1　小学部低学年「社会性の学習」の指導案例

この指導案例は、東京都教育委員会の自閉症教育推進事業における「社会性の学習」について実践研究の中で扱った授業の指導案であり、通常の指導案とは違った形式となっております。

小学部１年　「社会性の学習」指導案

1　題材名　①「みんなでたいそう」　②「はらぺこあおむし」パネルシアター
③「蝶になって友達にとまろう」　④「あくしゅでこんにちは」

2　学級の実態と題材設定の理由

小学部１学年は自閉症学級が２学級あり、児童数は９名（○組５名、□組４名）である。９名の児童の実態や発達段階にはそれぞれ差があり、①初期社会性発達アセスメント（ＡＥＳ）や新版Ｋ式発達検査及び②行動観察等を基に、それぞれの児童に適切な課題を設定するようにしている。また、そのために９名の③児童を適性に応じてグループ分けをした。６名の児童のＡグループと、３名の児童のＢグループに分かれて「社会性の学習」に取り組んでいる。

ここからはＡグループの児童について中心的に述べる。

ＡＥＳの結果からＡグループ（a 児から f 児）の児童は、24 ページの初期社会性発達アセスメントによる各レベルの達成率のグラフを見ると、レベルⅡ（目標と知覚の共有）がほぼ 80％以上であり発達レベルはレベルⅡである。発達支援レベルはその次のレベルであるので、発達支援レベルはレベルⅡ（目標と知覚の共有）からⅢ（意図と注意の共有）となる（26 ページ初期社会性発達アセスメントの表を参照）。

また、日常の行動観察から、Ａグループの児童は小集団の中でも課題に集中でき、友達に対しての関心を持った行動も見られる。

Ａグループでは、ＡＥＳのアセスメント等を基に発達支援課題を、レベルⅡステップＣの表象の共有を目的とした課題から、レベルⅢステップＡの役割理解と交替を含む社会的ゲームへの参加の課題となるように設定した。

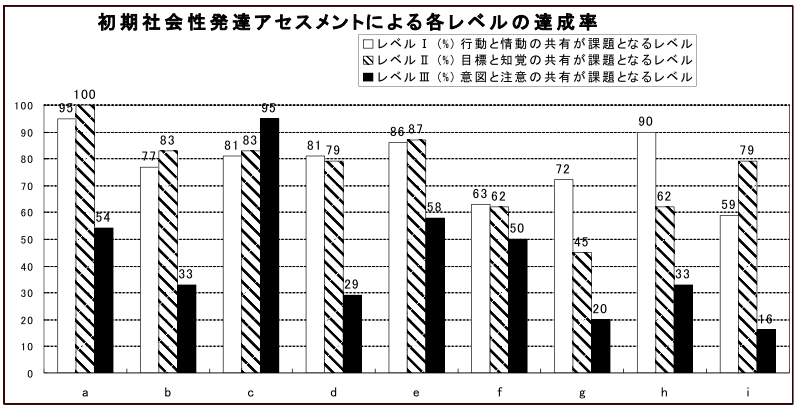
活動の内容としては、人との関わりに関することを中心に取り組んでいるが、できるだけ児童が意欲的に取り組めるような題材を設定している。ＡＥＳの領域ごとに達成率を見ると、④情動共有の達成率が他の領域と比べて低い児童の集団なので、快の情動を共有できるように、楽しい雰囲気を大切にし、児童が⑤興味や意欲を持てる題材を設定し、大人や友達と直接、あるいは物を介して関わっていく活動に取り組んでいく。

また、程度の差はあるが、長い時間の活動になると集中力の持続が難しくなる傾向にある児童の実態を踏まえ、45 分の授業を、動的な活動と静的な⑥活動を組み合わせ、Ａグループでは３～５程度の活動で構成している。それぞれの活動は、児童の様子や成長に合わせて少しずつ変えていきながら、新しい活動に取り組むようにしている。

解説

① 初期社会性アセスメント（ＡＥＳ）

筑波大学の長崎勤氏らが開発した、主に学齢期前半程度までの自閉症児の初期社会性発達支援プログラムの中の発達支援レベルを設定するためのアセスメントです。ちなみに本指導案の学級の９名の児童の各レベルの達成率は右グラフのとおりです。各レベルとも80％が達成の目安となり、達成レベルの次の段階が発達支援レベルとなります。



ａ児からｆ児まではＡグループで、レベルⅡまで大体達成（ｆ児については後述する。）しています。ｇ児からｉ児まではレベルⅠ～Ⅱが課題となる（発達支援レベル）Ｂグループの児童です。

このＡＥＳのアセスメントの結果を基に、初期社会性発達支援課題（ＴＥＳ）の指導課題を選択していきます。ＡＥＳの各レベルに対応した支援課題には、それぞれＡ、Ｂ、Ｃの活動ステップがある。

② 行動観察等

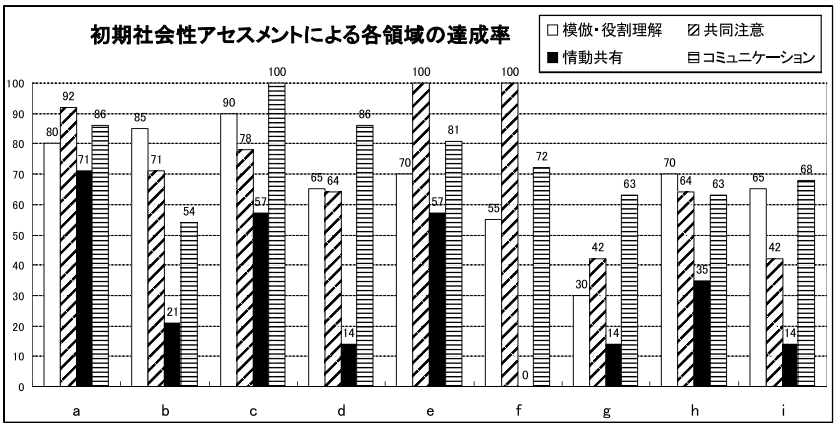
一つのフォーマットに基づくアセスメントは､客観的に児童の様子や実態を捉えることや妥当性のある指導内容の設定には必要なものではありますが、日常の行動観察も大変重要です。アセスメントには表れない実態を捉えたり､グルーピングをするときの児童同士の相性などを考える上では必要不可欠で、何より、アセスメントを指導場面に生かすには日頃の丁寧な行動観察が欠かせません。

③ 児童を適性に応じてグループ分け（指導形態の工夫）

年度当初は９名全員で「社会性の学習」を行っていましたが、待ち時間が長くなることや、各児童に合った活動を設定することに無理がありました｡ＡＥＳや行動観察によりＡグループとＢグループに分けて行うことで、児童の実態に合った集団の大きさで、実態に合った課題設定ができました。人的配置や教室環境の制約もありますが､児童の実態や発達段階に応じたグループ分けをするといった指導形態の工夫は大切なことです。

④ 情動共有の達成率

右のグラフは９人の児童のＡＥＳの各領域ごとの達成率です｡「模倣･役割理解」「共同注意」「情動共有」「コミュニケーション」の４つの領域がありますが、どの児童も「情動共有」の達成率が低いことが分かります。ｆ児はこの項目の達成率が０％であるために、上記各レベルの達成率が低めに出ています。行動観察等によりｆ児については情動共有に関して伸びが期待できたのでＡグループにしました。



⑤ 興味や意欲を持てる題材

題材設定をするときに大切にしたことは、児童が「やりたい」と思う題材を用意したことです。児童がやりたいと感じる要素には、興味や関心があること、楽しいこと、分かることなどがありますが、そのようなやりたい活動だからこそ児童の意欲が出て､相手を意識した積極的な関わりや自発的な行動が生まれてくると考えました。あまりやりたくない活動であれば､児童はただやらされているような形になりやすく、達成感もあまり得られません。やりたい活動であれば、例えば｢やりたいけれども順番を待つ｣というような場面でも、待つということを意味のある行動として理解し、待てたときに褒められたりスムーズに状況が流れたりすることで達成感を持ちやすくなります。

⑥ 活動を組み合わせ

子供たちにとって 45 分の授業は長いので、いくつかの活動を組み合わせて行いました。特にＢグループは分かりやすく短い活動をたくさん組み合わせることで、子供の活動量が増え、集中できる場面が増えました。また、そのことで授業での活動において自発的な行動も見られるようになりました。